

## 漢字の生きいきとした表現力が見直されはじめた！

平成8年1月5日、NHK テレビ特別番組として『ミラクル漢字ワールド』が放映されました。この番組には私も参加しましたが、「この頃、カタカナに替わって漢字が使われる傾向が目立ってきたが、それはどうやら漢字がもつ不思議な魅力のせいらしい」という趣旨のものでした。

たとえば、商品名にもビールを“麦酒”と書いたものが現れたり、“黒(生)”“辛口”という表記が使われているばかりでなく、“淡麗(端麗ではない)”“豊醇((豊潤でもなく、芳醇でもない)”という新造語までが出現しています。

“クロ(ナマ)”と“黒(生)”、“カラクチ”と“辛口”。比べてみればその違いがよくわかりますが、漢字は、カナやローマ字と違って一つひとつの文字が生きいきとした特有の意味をもっていて、見る人の目にそれを一瞬のうちに語りかけてきます。

これに対し、カタカナ、とりわけ外国語をカナ書さしたものは読みにくく、また読んでみても意味のはっきりしないものが多いのです。

これまで、その曖昧な表現あいまいが多く日本人に好まれる傾向にあったようですが、ここへきて、ひと目見ただけで強い印象を与えることを要求される商品名などに、漢字が多用されるようになったというのは、単なる懐古趣味ではなく、漢字一字一字がもつ豊かな表現力が見直されはじめた、ということでしょう。

また、ちょっと意外かもしれませんが、現在、世界中の文字の中で、もっとも有効な表記法と言われているのは、実は漢字かな交じり文なのです。

このことは、1960年代に、世界的な言語学者ノアム・チョムスキーがすでに予想しておりましたが、その20年後、アメリカのMIT(マサチューセッツ工科大学)の実験により、見事にこれが証明されました。そして、他界中を驚かせた、明治期や戦後における日本の経済発展の原動力の根底には、世界一速く正しく情報が吸収できる“漢字かな交じり文”があった、という指摘もなされているのです。

漢字のよさが見直されはじめているとはいえ、日本人の中には、まだまだ横文字やカタカナ言葉を有難がる傾向が強いものです。ところが、情報化時代と言われる今だからこそ、逆に、世界に誇れる“漢字かな交じり文”というすぐれた表記法をもっともっと大切にしてみたいのではないのでしょうか。